

どうする 福祉

縮む日本の処方箋

未婚のひとり母「まるでペナルティイヤー」

「3歳まで手元に置いておいたらええやんか。子供がかわいそうや」
シングルマザーとして長男



小学校5年生の長男とキャッチボールするシングルマザーの西崎麻衣さん
11月6日午後、大阪市西成区

(11)を育ててきた大阪市内に住む西崎麻衣さん(35)は、パートに出るため生後3カ月の長男を預けたときの母の言葉を今も覚えている。
日本にはかつて、3歳までは母親が育てないと子供の発達に影響するとされる「3歳

第1部 就労×年金 ②

児神話」があった。専業主婦だった母の気持ち、西崎さんも理解はできる。だが、「子供がかわいそう」とは思えなかったし経済的にも難しかった。

大学卒業後、東京のIT企業で営業職に就いた翌年、23歳で妊娠。相手の男性とは婚約したが、妊娠5カ月目で破棄され、仕事を辞め大阪の実家へ戻った。だが、婚姻歴がないことが経済的苦境に拍車をかけた。市営住宅には「単身者」とみなされ入居できなかった。出産の3カ月後、パートで働き始めたが、配偶者と離婚または死別したひとり親に適用される税の寡婦控除は適用されない。保育所でも保育料の減免はなかった。

3歳児神話の呪縛

25歳で転職し、正社員として働き始めたが、「婚姻制度の枠にはまらないことへのペナルティイヤーを受けているようだった」と胸中を明かす。大阪市に陳情を重ね、市独自の施策で寡婦控除を受けられるようになったのは平成26年。長男は年長児になっていた。

しかし、「3歳児神話」の呪縛は、子供が3歳になっても続いた。「母親は母親業に専念すべきだ」との考えから、自宅から1駅圏内で残業の少ない仕事でなければ、母は許してくれなかった。
令和2年度の税制改正大綱で寡婦控除対象に未婚のひとり親が加えられ、国民年金の

保険料免除対象とする議論が進んでいることに、「やっ」と思う。

小さいころから手がかからない子だった息子。思い浮かぶのは、通園かばんに自らオムツを詰め込む小さな背中だ。「子供らしくさせてあげたかったのに、早く大人にさせてしまった」

スウェーデンでは

「私は母が医師で、生後6カ月で預けられました」
そう語るのは日本人ではない。ストックホルムに住むカティア・マクヌソンさん(44)。「専業主婦なき国」と呼ばれるスウェーデンは、日本の3歳児神話とは無縁だ。希望する子供たちが1歳から通う「保育学校」は、小学校までの就学前教育と保育を統合したスウェーデン独自のシステ

ム。働く母親の支援ではなく、国民教育の場と位置付けられている。親の負担は収入によるが、首都ストックホルムで月最高1425珦(約1万7千円)程度。家庭保育は1歳までが基本で出産後、両親は計480日間の手当付き育児が取れ、最高で所得の8割が支給される。

マクヌソンさんは西崎さんと同じく未婚で出産。違うのは、「父親はいらない」と自らシングルマザーを選択したことだ。1年間の育休後、フルタイムで復帰し、2歳の長男を午前8時から8時間預けている。お迎え後、家で残業することも多い。
対照的な日本と北欧の保育をめぐる環境には、国家観などの違いが横たわる。

【3歳児神話】

3歳までは母親が育てないと子供の発達に影響するとされる、日本で広まっている考え方。

3面に続く